

すでにヘルトラが指摘しているように、レンブラントは、同一主題の作品を複数のジャンルにわたって制作することが少なくない。盲目性は、そのような主題のひとつである。また、これも複数の先行研究で言及されてきたことであるが、レンブラントが画業を通じて数多く制作した旧約聖書外典のトビト記を原典とする連作には、盲目性への画家の関心が確かに表れている。しかし、トビト記の主人公は盲目のトビトだが、17世紀のオランダでトビト記は、信心、勤勉ならびに相互協力の啓蒙書として受容されており、物語自体も、必ずしも盲目性をテーマとしたものではない。にもかかわらず、レンブラントによるトビト記連作の背景には、盲目性に対する画家の偏好が指摘されてきた。そのような指摘は何を根拠に行われたのか。トビト記連作に付与されたとされる盲目性のテーマには、どのような意味があるのだろうか。

本発表は、トビト記連作の分析を通して、先行研究では検討しつくされずにいた、盲目性に対するレンブラントの認識の解明を試みるものである。トビト記連作は素描、エッチング、油彩を合わせて50点以上制作されている。それらを物語場面、媒体、制作時期、制作順で分類することで、トビト記連作の制作傾向が明らかになるだろう。

トビト記の物語において、トビトの盲目に言及する場面は限られている。その中でもレンブラントによる作品が特に集中しているのは、旅から帰った息子トビアがトビトの目を治療する場面である。1636年の油彩画が、この場面を最初に描いたものとされている。この作品は現在工房作と考えられており、レンブラントの素描をもとに弟子が制作した可能性が高い。その油彩画から6、7年後に、レンブラントはこの場面の素描を再開している。ベネシュによると、素描は1650年まで8点（コピー1点を含む）が制作された。しかしそれらの素描を下絵とする油彩ならびにエッチングはない。これに加え、トビト記には詳述されていない盲目の描写がエッチングに残されていることにも注目したい。原典ではトビアを出迎える母親のハンナについての記述が中心になっているが、このエッチングでレンブラントは、旅から戻ったトビアを盲目のトビトがよろめきながら玄関で迎える場面を採りあげている。このことから推測されるように、盲目のトビトの描写は、レンブラント個人の想像や意向に基づいたものである。

原典では付帯的にしか扱われていない盲目の人物描写の挿入は、レンブラントが盲目性に特別な関心をもつことを示している。また、素描によるトビトの目の治療場面の反復は、視覚の再獲得が、画家に強く訴えた結果であると解釈できる。本発表では、「トビトの目を治すトビア」の作品群ならびに1651年のエッチング《トビアにかけよるトビト》を中心に考察し、盲目を恐れる画家の姿を浮き彫りにしたい。